

三中と自分

三中昭和21年入学 梅原 郁

成績が悪く、おまけに担任に嫌われ、一中の内申を書いても
らえず、やむなく三中を受験して辛うじて入学できた。このた
め、大文字山の麓から、双ヶ丘近くの学校まで、京の東西をほ
ぼ毎日往復する破目に陥った。現在のような受験世界では、想
像もできぬことであろうが、改めて振り返ってみると、この往
復三〜四時間は、自分の人生にとって、得難い財産を与えてく
れた貴重な時期だったように思う。受験勉強なんて同級生の殆
どは考えてもいないから、一週六日、下校の時には、必ず友人
たちと三々五々、道草を喰い、夏にはアイキャンを齧りながら、
千本通りまで歩く。次第に改善されたとはいえ、市電は色も形
もとりどりで、窓は三分の一だけガラス、あとは木板という状
態。登校時のラッシュには、電車の後部にぶら下がり、時には
すれ違う側の入口にへばりつくことも稀ではなかった。そこで、
帰りは、比較的空いている、千本から百万遍に行く「あ」(の
ち①)という循環系統に乗るため歩くのである。昭和二十一年
は公立中学の区域制が止められたとはいえ、旧三中の通学者は

大宮以西の者が圧倒的に多く、彼らは徒歩通学だったから、一緒に帰る友人には事欠かない。北は一条通り、中は大將軍から仁和寺街道、南は下立売通り、時には小松原から金閣寺まで歩き、北大路線に乗る。その日の天気や友人の集まり方で、選択は自由自在である。戦闘帽にカーキ色の制服（？）、布製の肩掛け袋という姿で、進駐軍以外は車など縁のない通りを、子犬のようにふざけあいながらの下校が繰り返された。

ではそれがどうして貴重な時間だったのか。一緒に下校した友人たちは同級生に限らず、その友人も加わり、交遊の輪が広がる。喧嘩、口論、殴り合いなど毎日起こるが、それによつて友達との付き合い方、他人の気持ちを付度する機会が絶えず与えられる。一人子で我が儘な自分には、そうした繰り返しはまたとない勉強になった。最近の新聞では、他人との関係が調整できぬとか、お宅族の一人ボッチとかがしばしば話題になるが、三中時代のこのような毎日を送った者には、正直理解出来難い。ここで経験した友人との繋がりを作るコツは、その後高校、大学でも本質的には変わらず、数多くの優れた友人たちと絶えずお付き合いができるのは、私の人生にとつて何よりの財産と言えるであろう。

道草といつても、帰り道周辺の様子は、私の家のある、花売、石屋などの間に大学関係者の住居の混じる白川村とは大いに違う。特に五番町や上七軒の花街、西陣の織子さんたちの生

活の場などからは、強烈な印象を受けた。上七軒は兎も角、五番町の話となると、急に皆声をひそめ、先生には怒られる始末で、そうになると益々興味が沸くのは仕方がない。のちに、溝口健二と五番町の話などを讀むと、その状況が手にとるように分かるのも当時ナマの知識を吸収していたからである。私は歴史を専門としているが、過去に生起した事柄を、残された史料から再生させるのには、現在の知識を通じた過去の追体験が必要になる。簡単に言うと、色々な事をできるだけ沢山知っていることが有力な武器であり、限られた狭い世界の知識では歴史屋は勤まらない。歴史屋は野次馬であり世俗的な面を持つものだが、そうした意味でも、三中の下校時、詰め込んだ北野から西陣一帯の雑多な見聞は、のちに大いに役だった。

同窓生との横の繋がりが以外に、クラブによる縦の関係も生じた。きっかけは忘れたが、入学すると直に生物班に加わった。校内西南、木造校舎の中でも特にボロイ一角に生物教室があり、部室には昼食時には十数人の班員が集まる。運動部のようなシゴキは全くなかったが、そこでは同級生からは得られぬ教育を受けた。さきの五番町の詳細などは、上級生が懇切丁寧に話してくれた。植物や鉱物屋もいたが、班員の大部分は昆虫屋で、中でも蝶々取りが多かった。春から夏の季節には、毎週日曜は誰かと採集会に出かけ、腹ペコで湯ノ花から亀岡まで歩いたり、

鞍馬から大悲山へ往復したものである。さらに七月になると、学校をサボって、北山の草火谷や、比良の武奈ヶ岳に泊まり込みで蝶を追った。それには大学の先輩が加わる時もあり、何せ生物班だから、焚き火を囲んで猥談の花が咲いた。学制の改革は目まぐるしく続き、三中では下級生は出来なかったけれども、こうした先輩たちとは現在も、年に一度は大騒ぎを繰り返している。

肝心の学業の方は、何を習ったか全く忘れてしまった。体育館の南に松の疎林があり、その中の渡り廊下を先生たちが走って、我々の木造校舎へやってくる光景が眼底に残る。私の担任は、一年が国語で亀岡の竹岡オサヤン、二年は記憶が薄く、三年は歴史のモンダルこと沢潔先生だった。木曾のカルサン風のもんぺを履き、丸い体形から「もんぺだるま」を略してモンダルとはうまいあだ名で、最近の中・高生は、そうした形で先生に親愛の情を現すことも少ないであろう。二年まで松林の中で過ごし、三年には五中と二部授業のため、運動場北端の網を張った木造校舎に追いやられ、遂に一度もコンクリートの新館教室に入らず、今ではそれら総てが、上記思ひ出の情景とともに永遠に消え去ってしまった。三年の時、野球部の藤原投手を、巨人の中島助監督と中尾投手がスカウトにやってきた。その日の国語の時間、三沢のヒス先生ねちゃんは、二時間かけて日本のプロ野球と巨人の講義をしてくれ、私はいっぺんに三沢先

生を見る目が変わり、晩年病院などで偶然お目にかかる、親愛の情をこめてご挨拶したものである。

古稀を過ぎた年寄りの、六十年前の昔話が後輩に役立つとは思えない。私の専門は中国史である。中国と日本は古来繋がりが深く、表面的には現在とてそれは変わらない。しかし現実には日本人が中国を理解することは、欧米理解よりも遙かに困難であろう。そうした外国中の外国のことを、研究するためには、知識と語学力の蓄積が要る。私の三中時代の体験（遊び）はすべてその準備の一部だった。それは、かつて京都学派と呼ばれた、桑原武夫や今西錦司たちの大枠に通じるものであり、父親はじめ学者たちに囲まれた環境の自分は、時が来ればそれまでの遊びを学問に有効に投入するコツのようなものを、門前の小僧として身につけていた。そこで、それほど苦勞しなくても、何とか研究生活が送れた。ところが、大学紛争が終り八十年代に入ると、大学は変貌し、研究、学問のかたちや性格が著しく変化し、とりわけ人文科学でそれが顕著になる。早い話、いくら国際、学際と騒いでも、各人の基礎になる学力や知識が絶望的に低く、おまけにその自覚に乏しいのでは話しにならない。人文系の学者を志す人たちは、偏差値などは表面的、技術的な通過儀礼と心得、TVゲーム、漫画、携帯電話をやめ、本気で書物を読み、語学力を身につけて欲しいものである。